

教育週間特別講演

「科学の力で文化財を見、そして伝える」

平成22年11月23日（祝）

奈良大学文化財学科教授

西山 要一 氏



今日は『科学の力で文化財を見、そして伝える』が大きなテーマです。

「X線透過写真から古代の人びとの願いを知る－吉備塚古墳の象嵌大刀」「赤外線写真・年輪から古代の人びとの技を知る－百万塔」「何を未来に伝えるべきか－河島英五さんの壁画」この3つに小テーマをしぼり話を進めていきまして、みなさんと一緒に文化財はどうして大切に保存されてきたのか、これから守っていかなければならないのか、未来に伝えていかなければならないのかということを考えていきたいと思います。

さて、「X線透過写真から古代の人びとの願いを知る－吉備塚古墳の象嵌大刀」ということなんですが、国立奈良教育大学の構内に吉備塚古墳があります。5～6年前になりますけれどもこの吉備塚古墳を発掘調査して木棺の痕跡が見つかったんです。この埋葬施設には刀、鎧、馬具などあります。そして、この刀に注目してほしいんです。三累環頭大刀と言いまして、三つの輪っかが繋がった環状の刀の飾りの大きな刀ですね。こういう形の刀そのものは珍しいんです。輪の中に人というか蛸のような形をした人形(ひとがた)がありますけれども、これは初めてです。中国や韓国を捜してみましたが、これと同じようなものはありません。ですから今のところ世界で一つしかない形なんです。さて、刀の鞘や柄の部分が非常に良く残っておりますので、レントゲンをとってみました。そうしましたら環の中の人形には手、足、体、顔そして口と目がはっきりと作られてるというのがわかります。折角だからと刀全体を撮ってみると、白い線の文様、実は象嵌文様があるということがわかりました。この吉備塚古墳の刀の文様の龍形と虎形、花形それからその尻尾と羽がある人(羽人)は、仙人の住む世界、永遠の生命と食べ物に腐心することもない仙界、これは道教の神仙思想ですね、それを目指して進んでいっている、そういう情景を表している模様です。幸福になれるようにという願いがこめられたものです。ですから、この刀は文字で書かれた以上の素晴らしい象嵌文様による表現と言っているんじゃないかと思います。これもレントゲン写真を撮影したからこそわかったということです。

さて、二つ目の話題の百万塔です。法隆寺の宝物館にたくさん並んでいるのをご覧になったことがあるかと思います。高さ24.5cm位でしょうか。木製の塔ですね。相輪を外すと孔があり、この孔の中にはお経が入っています。お経を巻いて納めて、蓋をしている。表面に白土という白い絵具が残ってますけれども、元々は全面真っ白に塗られていました。この百万塔については続日本紀にでています。「天皇八年乱平ぎてすなわち弘願を發し三重の小塔、一百万基を造らしむ」と書いてあります。天皇八年というのは称徳天皇の天平宝字八年(764年)のことです。恵美押勝(藤原仲麻呂)の乱を治めたというのが「乱平ぎて」にあたります。それをきっかけに押勝の霊をなぐさめ、平安の願い事をこめて三重の小塔、百万塔を造らせたということなんです。百万塔の底を赤外線写

真で見たら、何が見えますか。皆さんに解いてもらおうと思いまして本物を持って参りました。実際にご覧いただきますのは赤外線テレビの画像なのですが、スライドの画面は赤外線写真で撮ったものです。左側には大伴石勝(おおとも いわかつ)と書いてあります。平城京に木工寮という木の細工をする役職があり、その工房に属する大伴石勝が百万塔をロクロで造りましたと記しています。右側に記されている云、二、六、卅は神護景雲 2 年 6 月 30 日のことで、大伴石勝が百万塔を造った日を示します。でもこれは仕上げに白い絵具を塗りますのでこういう書付はわからなくなります。ですから最近までこういうものが書かれているとわからなかったんです。ところが赤外線テレビで不思議でしょ。肉眼では見えないものがはっきりと見える。こういう調査をしますと、法隆寺に 7 000 基あるのだから、後々の時代に真似して造ったものが混ざっているに違いないという話だったんですが、それはないということがわかってきたのです。百万塔は木製ですから裏底を見ると年輪が隠されています。その年輪を調べると、この木が 700~750 年頃伐採され製作されたのがわかりました。これを年輪年代法といいます。こういう年輪年代法という新しい方法を使ったり、あるいは赤外線写真を撮ってみると古代の人たちの生き様といいますか、工夫や、技術、そういうものも見えてくるのです。

さて、最後の話題は「何を未来に伝えるべきかー河島英五さんの壁画保存」です。河島英五さんが絵を描いたのは大阪の宗衛門町で奥さんが経営していた喫茶店です。十年前くらいでしょうか、大きな火事があり焼けてしまいました。その焼けた喫茶店の壁に絵が描いてあり、消火の水がかかったりして痛んでたんですね。この時には河島英五さんは亡くなってたんですが、奥さんと息子さんがこの絵を何とか残したいと思い私に相談されました。表面の絵がある部分が壊れないように、表面に和紙をあてがい、スポンジを重ねてその上に合板をネジでとめて養生し、周囲を切っていったんですね。そして 30 面くらい切り取ったのを持って帰り、大学では、文化財の保存科学実習の資料として喜んで保存修復しました。その方法は、表面のモルタルが火をうけて非常に脆く弱くなっているので合成樹脂をしみこませます。これが乾くと強くなる、丈夫になる。そういう作業です。全部仕上げて奥さんと息子さんに渡しました。

さて、文化財の保存を考えましょう。皆さんは百万塔や吉備塚古墳鉄剣をご覧になったら、これは文化財やなあと納得されますよね。では、歌手 河島英五さんが壁にかいた絵がどれだけの価値があるのか。文化財の保存を考えますとこういう問題にいきあたります。つまり 1200 年、1500 年前のものを残していく、これは大切に先祖が残してきてくれたものであるし、歴史を振り返るために大事なもののやから、私たちの世代できっちりと保存して後世に伝えていかなあかん。発掘した遺物もそうですね。これは誰しもが認めてることだと思うんですね。じゃあ、今現在私たちが生活している中で大事なものを残しているやろか。河島英五さんの絵もそのひとつだと思います。私たちの身近にはいろんな文化財があります。ちょっと大げさにいうなら、ひとりひとりが「私にとって大事なものは文化財」と思ってもいいんですね。そして、大切にする気持ちが大事ななんやと思うんですね。保存科学や修復は実際に樹脂を使って保存処理したり、文化財を残すための技術的なことはできるけれども、50 年先、100 年先まで保存して大切にしていくことが大事なんじゃないか。ですから、一人一人が文化財を大事にしていくそういう考えを広めることができたらなあ、と思っています。今日のお話はこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。